

ともしび双書

神奈川県福祉作文コンクール 入選作品集



第34回ともしびポスターコンテストともしび大賞受賞作品

平成 25 年度版

まえがき

明日の日本を担う子どもたちが、作文を通じて、「助け合い」や「思いやり」の心を育む機会となり、誰もがお互いを支え合う「ともに生きる福祉社会」の実現を目指して、この福祉作文コンクールは昭和五十二年に始まりました。

三十七回目を迎えたことしは、県内の小・中学校合わせて二百五十四校から九千三百九十六編の応募がありました。小・中学校別に、県内の市区町村ごとの地区審査会および県審査会（一次・最終）を経て、優秀賞十六編、準優秀賞二十編、佳作二十編を決定いたしました。

本作品集は、入選作品の中から優秀賞の十六編を掲載しました。どの作品も、体験や経験を通じて自ら感じたことや考えたことが自分の言葉で書かれています。この作品集が大勢の皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、助け合い、大切にしようとする気持ちが社会に広がることを期待しています。

本来ならば、すべての入選者の作品をご紹介したいところですが、紙面の関係で準優秀賞

及び佳作は、入選作品の題名・学校名・氏名のみ掲載させていただきましたので、ご了承ください。

結びにあたりまして、このコンクールに参加した小・中学生の皆さん、指導にあたられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査いただきました委員の方々に、心よりお礼申し上げます。

また、神奈川県、神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、神奈川新聞社、テレビ神奈川、日揮社会福祉財団のご協力に深く感謝申し上げます。

平成二十六年一月

社会福祉法人神奈川県共同募金会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会

審査にあたられた方々

| | | |
|-------------------|----------------------|-------|
| 日本放送協会横浜放送局 | 放送部部長 | 相馬宏治 |
| 株式会社テレビ神奈川 | 事業部長 | 嶋田充郎 |
| 株式会社神奈川新聞社 | クロスメディア営業局 企画推進室 副室長 | 長倉勉 |
| 公益財団法人日揮社会福祉財団 | 評議 | 佐藤則行 |
| 神奈川県保健福祉局福祉部 | 地域福祉課 課長 | 西條由人 |
| 神奈川県立総合教育センター | 教育人材育成課 指導主事 | 小林美奈子 |
| 社会福祉法人神奈川県共同募金会 | 常務理事 | 八木明 |
| 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会 | 常務理事 | 矢野敏行 |

(順不同/敬称略)

第37回神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 目次

小学生の部

優秀賞

神奈川県知事賞

おばあちゃんがころんだ

横浜市立都筑小学校

一年 折谷穂音子…………… 1

神奈川県教育長賞

大切な妹

開成町立開成小学校

四年 高橋 奈那…………… 3

日本放送協会横浜放送局長賞

ぼくと九十五才のお友だち

相模原市立川尻小学校

五年 輿水 駿介…………… 5

テレビ神奈川社長賞

すずかぜ

南足柄市立北足柄小学校

一年 大野朱々風…………… 7

神奈川新聞社長賞

ゲートキーパーの広がり願って
伊勢原市立竹園小学校

四年 細田 斐葉…………… 9

ふれあい賞

がんばれお姉ちゃん

相模原市立大沢小学校

五年 末田 航大…………… 11

神奈川県共同募金会長賞

心豊かな国のために

聖セシリア小学校

六年 宇田川海渡…………… 13

神奈川県社会福祉協議会長賞

かわいそうじゃないよ

大磯町立大磯小学校

五年 浅野 遥…………… 15

中学生の部

優秀賞

神奈川県知事賞

コミュニケーションについて思うこと

秦野市立鶴巻中学校

三年

渡部

将弘……………17

神奈川県教育長賞

今の笑顔があるということ

秦野市立大根中学校

一年

鈴木

華純……………20

日本放送協会横浜放送局長賞

「生きる」とは

伊勢原市立山王中学校

一年

須佐みづき……………23

テレビ神奈川社長賞

祖父が残してくれたもの

開成町立文命中学校

三年

鈴木

健……………26

神奈川新聞社長賞

介護の力

川崎市立南菅中学校

三年

宮城

麗子……………29

ふれあい賞

本当の幸せ

相模原市立藤野中学校

一年 本間敬之佑……………32

神奈川県共同募金会長賞

テニスボールのくつ

逗子市立久木中学校

一年 宮澤 栞……………35

神奈川県社会福祉協議会長賞

助け合い、一つになれる社会へ

厚木市立荻野中学校

二年 新井佑里恵……………38

準優秀賞・佳作入選者名簿……………

45

小学生の部

優秀賞

神奈川県知事賞

おばあちゃんがころんだ

横浜市立都筑小学校

一年 折谷 穂音子

このまえおばあちゃんとおばあちゃんがあるいていたら、おばあちゃんがないところでもありません。おばあちゃんがおばあちゃんをちよつとしかあげなくから、ちよつとしたんだんさでもころんでしまうそうです。

おうちにかえってからそのはなしをすると、おばあちゃんがおばあちゃんをちよつとしかあげなくから、ちよつとしたんだんさでもころんでしまうそうです。

そのはなしをきいて町をよくみてみたら、大きいだんさや小さいだんさがたくさんありま

した。わたしはいつも、そのだんさがきにならないけれど、おじいさんやおばあさんにとつてはとてもきけんなんだとおもいます。きをつけていても、きつところんでしまうことがあるのだとおもいます。

だから、おばあちゃんがころばないようにするためにどうしたらよいか、いろいろかんがえてみました。

まず、あしをあげにくいのがりゆうなら、あしをあげやすくなるように、かるいくつをはくといいとおもいます。おばあちゃんがいまは持っているのはかるいくつですが、もつともつとかるいくつを、こんどいっしょにさがしにいけます。

あと、ふだんからうんどうすると、よくあしがあがるようになるとおもいます。おばあちゃんは、はしつたりするのはたいへんだから、ラジオたいそうをいっしょにするのがいいとおもいます。

くつをかえたり、うんどうをしたりするのもいいけれど、だんさがなくなるのがいちばんかもしれません。

町づくりのべんきょうができる大学があるそうなのでそういう大学に行きたいです。そして、だんさのない町をつくって、そこにおばあちゃんとすみたいです。

いろいろなくふうをして、おばあちゃんがころばないようになるといいです。

優 秀 賞

神奈川県教育長賞

大切な妹

開成町立開成小学校

四年 高橋 奈那

私には二人の妹がいます。真ん中の妹は五才でもうすぐ小学生になります。その妹は知的しょうがい児です。実さいの年れいの半分くらいしか考えたりする力がありません。だからせつめいされても伝わりにくいことも多いので、ゆっくり、はつきり、短い言葉で伝える必要があるので。それに感じようのコントロールもしにくいから、絵カードを使うなどのくふうをして育てているお母さんも大へんそうです。

妹は生まれた時は元気な赤ちゃんでしたが、六か月の時によほうせつしゅをしたところ、朝とつぜん手足をビクビクさせて、目つきもおかしく意しきをなくしていました。きゆうきゆう車で運ばれ、お母さんは泣き、私もドキドキしました。病院でしばらくしたら先生に「命にはべつじょうはない」と言われ、お母さんは少しだけほっとしました。でもそれから今ま

ですつと治りようや入院をくり返しています。大へんな時は発作が一日にたくさんありますが、よい時は元気に公園で遊んだり、パズルで遊んだりしています。でもこれから先も発作のための点てきや薬はずつとつづくそうです。

知的しょうがいなどは見かけでは分かりにくく、ごかいされやすいのです。大きな声でさけんんだり、発作の時には人から見たらへんな様子や顔になります。でも、この時すべて妹が一番つらいのです。

私はみなさんにも、もっと病気のことやしょうがいのことを知ってもらいたいです。どんな病気の子でもお母さんは「大好き」と言っています。なのに「へんだ」「おかしな子」とか言われたら、お母さんはとても悲しいのです。心を持っていない人はいないと思います。バカにしたりわらったりするのを聞いたら「全せんおかしくないよ。色んな人がいるんだよ」と言ってみてほしいです。心がすーつとするはずです。私もそうしたいと思います。

私は妹に「もっと遊んであげたいな」や「一番下の妹にやきもちやいてるのかな？」と感じることもあるし、ストレスもたまるみたいなのでもっと気持ちを考えてあげないといけないなども考えます。

できないことがたくさんあるけれど、その分少しできたことが家族のたくさんさんの幸せに感じるから、やっぱりこの妹が大切なので、みなさんにも分かってもらいたいです。

優 秀 賞

日本放送協会横浜放送局長賞

ぼくと九十五才のお友だち

相模原市立川尻小学校

五年 輿水駿介

ぼくには、九十五才の友だちがいます。名前は、たづさんです。母の働くホームで暮らすたづさんが、ぼくに手作りのかめ人形をくれたことが、そもそものきっかけでした。

ぼくはお札に手紙を書き、たづさんも返事をくれました。こうして僕たちは友だちになったのです。

しばらくして、たづさんがぼくにとでも会いたがっていると聞きました。もしホームに他人が入れないのなら、近くの公園で待ち合わせしても会いたいと言ってくれたそうです。そんなにもぼくに会いたいと思ってくれているなんて、とても嬉しかったです。

ホームの職員の人たちの協力もあり、ぼくは、たづさんに会いにホームに行ったのです。たづさんは、嬉しそうにぼくを迎えてくれ色々な話をしてくれました。

例えば、子どものころ毎朝五時に起きて家の茶畑を手伝っていたことや、昔は一銭でかき氷が買えたことなど、面白い話ばかりでした。

最後にたづさんは、

「私には子ども孫もないけれど、本当の孫が来てくれたみたいで、とても嬉しいよ」と何度も言っていました。

たづさんが喜んでいるのを見た職員の人に、「私たちよりもずっといい介護士だね」

と言われました。それを聞いて少しびびりました。ほくは、友だちに会いにいっただけで、介護など頭になかったからです。

「ぼくがしたのは、介護だったの？」

と母に聞きました。すると母は、

「介護とまではいかないけど、福祉の一部になるのかもしれないね」と言っていました。

友だちになることや友だちを喜ばせたいと思う気持ちが福祉につながるのかなあと、ほくは思いました。

今年の夏休みもたづさんに会いに行きました。たづさんは、ほくに会うと元気になるそうです。字を書くのが下手だから、手紙を書くのは苦手だとたづさんは言っていました。ほくに手紙をくれました。たづさんも、友だちを喜ばせたかったのかもしれない。

お互いがお互いを思いやること、それが福祉の始まりなのかもしれません。

優 秀 賞

テレビ神奈川社長賞

すずかぜ

南足柄市立北足柄小学校

一年 大野 朱々風

ようちえんのねんちようだったとき、「あすは、すずかぜさんへいきます」とせんせいがい
いました。わたしは、すぐになんのことかわかりました。いつもとおるみちに、「すずかぜ」
とかかれたおおきなかんばんがあります。わたしとおなじなまえのかんばんだって、いつも
ふしぎにももっていました。

はいつてみると、なんにんかのおばあちゃんがいました。わたしたちをみて、ニコニコわ
らっています。ようちえんでれんしゅうしたうたを、プレゼントしました。「おじいちゃんも
おばあちゃんもこどもだったってほんとうかな、いたずらばかりでしかられてたってほん
うかな」うたっているあいだ、おあばちゃんたちはずっとニコニコわらっていたから、ちい
さいときのことをおもいだしてわらっちゃったのかなって、おもっていました。うたいおわ

つたあとに、「あんまりきこえなかつたり、おみみはとおくのほうにわすれてきちゃったおばあちゃんもいるのよ」ときいてすぐくびっくりしました。きこえてなかつたのにどうしてあんなにニコニコわらっていたんだらう。かえるとき、おばあちゃんひとりひとりとあくしゅをしました。「ありがとう、かわいかったよ、げんきがでたよ、またきてね」たくさんのことばと、しわくちやだったけれどわたしのてをつつみこんでくれたあたたかいてをいまでもおぼえています。

つぎにおばあちゃんたちにあつたのは、あきのうんどうかいでした。めをあけるのもまぶしくて、おどるのもいやになつちやうぐらいあついあついひでした。よさこいをおどっているとき、テントのしたにくるまいすのおばあちゃんたちがみえました。きつと、よさこいのおんがくもあまりきこえなくて、めもあまりみえていないかもしれないのに、ニコニコわらいながらてびようしもしてくれていました。「こんなにあついのにみにきてくれたんだ。ありがとう」こんどは、わたしがおばあちゃんたちにげんきをもらいました。

すずかぜのかんばんのおうちには、まほうつかいのおばあちゃんたちがいます。すてきなじゅもんもそらとぶほうきもつかえないけれど、わたしにげんきをくれました。わたしも、おばあちゃんたちみたいにもいつもニコニコわらって、みんなにげんきをあげられるまほうつかいになりたいです。

優 秀 賞

神奈川新聞社長賞

ゲートキーパーの広がり願って

伊勢原市立竹園小学校

四年 細田 斐葉

今年のある夏の日のことです。

夕方仕事から帰ってきたお母さんが、

「今朝、人仕事こがあつて、お仕事にちこくしちやったのよ」と話してくれました。そして、

「電車にとびこんで自殺してしまふなんて、よほどつらいことがあつたんだろうけど、それを相談できる人がいなかったと思うと胸がいたむよね」

と続け、私に、「ゲートキーパー」という言葉を教えてくれました。

早速調べてみると、ゲートキーパーとは、なやんでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて必要な支えんにつなげて見守る人のことで、「命の門番」と言われているそうです。

私は今、学校に通えなくて苦しんでいます。学校に無理してがんばって通っていたときは胸が苦しくて生きるのがつらいと思っていました。

でも私には、やさしい家族と「ゆっくり休みなさい」「いつでもあなたのことを考えているよ」と言ってくれる担任の先生がいます。

そんな色々な人の支えで今の私があります。「生きていてよかった」と思えるようになりました。

もし自殺という悲しい方法をとるしかないところまで追いつめられた人たちにも、苦しさを受けとめようとしたり、解決の道すじを示してくれる人がいたら、それは、大きな希望になると思います。

そういう面で、これからは、ゲートキーパーが広がることが大切だと思います。

福祉と聞くと、お年よりや身体の不自由な方を支えることが思いうかびます。

でも、ぱっと見たときは、何にもないように見えても、ふとしたしぐさや表情から、その人の心を見て、一言「大丈夫ですか」と声をかけることも、人と人が支え合う福祉の一つだと思います。

だれもが生きていたい、生きていてよかったと思える、そんなやさしい社会にしていきたいらと思います。

私たちだれもが、だれかの心を支えるゲートキーパーになれたらいいと思います。

優 秀 賞

ふれあい賞

がんばれお姉ちゃん

相模原市立大沢小学校

五年 末 田 航 大

ぼくのお姉ちゃんは、多発性こうしゆく症という全身の関節が固い、一生治らない病気です。でも、お姉ちゃんのこの病気の症状自体は軽いのですが、足の筋力が弱く、伝い歩きまでしかできません。お姉ちゃんは出かける時、車イスを使います。家族で出かけた時などたまに横を通る人に変な目で見られる時があります。でも、気にしないでいることがすごいいと思います。ぼくなら人にジロジロ見られたら気にしてしまいます。

ぼくは、お姉ちゃんがみんなと同じことをしたいと願っていると思います。何にでもチャレンジしようとするところは、すごいと思います。今年、音楽委員会の活動があるので、きらめたみたいですが、運動会の応えん団になろうと思っていました。ぼくは、応えん団になったので、お姉ちゃんの分もがんばろうと思います。そしてお姉ちゃんの応えん団になり

たいです。

ぼくは、たまにお姉ちゃんといけんかをします。お姉ちゃんは力が強いので、ぼくはよく負けてしまいます。でも、いつもはやさしくてたのもしいお姉ちゃんです。

お姉ちゃんは手すりをつかめば歩くことができます。でも、手すりがない場所も多いので、そういう時はぼくのかたにつかまります。エレベーターがなく、かいだんしかないところは、車イスからおりて歩かないといけません。お父さんが車イスを持ち、お母さんがお姉ちゃんを支えてかいだんを上がります。まだまだバリアフリーになっていない所も多く、「ふべんだなあ」と感じることも多いです。そして、ちゅう車場のしょうがい者スペースに、元氣そうなたちが車をとめているのをよく見かけます。その場所に車をとめたい人がいるのに、とめられないのはおかしいと思います。ふつうの人はせまい所でも乗りおりできます。でもお姉ちゃんのように車イスを使う人たちは、乗りおりが大変です。車をとめる時は、そのスペースを必要とする人たちのことを考えてとめてほしいです。

ぼくのお姉ちゃんの病氣は一生治らない病氣と言われていますが、この病氣を治す方法を早く見つけてほしいです。もし病氣が治ったら、外でいっしょに走り回りたいです。ぼくはこれからもお姉ちゃんの応援団としてサポートしていきたいです。

優 秀 賞

神奈川県共同募金会長賞

心豊かな国のために

聖セシリア小学校

六年 宇田川 海 渡

祖母は、僕が二才の時にパーキンソン病を発症しました。パーキンソン病とは主に四十才から五十才以降に発症し、ゆっくりと進行する原因不明の神経変性疾患です。ゆっくりり症状が進み、会話をする事ができなくなりました。僕の記憶に、祖母の「声」はありません。どんな声だったのか、やさしい声と周りの人は言うけれど、直接確かめてみたかったです。病気の進行を和らげるために、家族でできる限りサポートしました。特に、祖父のサポートには頭が下がることがたくさんありました。自宅からしせつに移ってからも、仕事のあい間など一日何度も毎日欠かさず通っていました。部屋には好きだった花をかざり、祖母は甘い香りにつつまれていました。体調の良い日には車いすの祖母と隅田川沿いを散歩し、河原で歌をうたったりもしていました。特に好きだったのは、坂本九さんの「上を向いて歩こう」で

した。祖母は歌に反応し、涙を流すこともありました。涙は「ありがとう」という声のかわりだったのだと思います。しせつでの洗たく物のかんそうは機械を使うので、直接太陽に当たって方が良いとすべて祖父は自宅で洗たくしていました。仕事をしながらのかい護はとても大変だと思いました。僕は祖父の体を心配しました。でも「だいじょうぶだよ」といつもがんばっていました。少しつよがつているような気がしました。祖母がお世話になっていたしせつは個室。ヘルパーさんはよく部屋へきてくれて天気やニュースのことなど、話かけてくれました。話かけてくれる人をじつとみる祖母の眼をいまだに忘れられません。たくさんの人に助けられながら、十年のさい月が流れました。祖母は、今年二月、家族が見守るなか天国に召されました。かい護する十年間をみて、考えさせられることがたくさんありました。これから、少子高齢化となるので、僕たちが福祉の現状をもっと知ることが必要だと思いました。かい護する側、される側の気持ちを考えて、誰もが安心して老後をむかえられる日本となるように僕たちが努力して行かなければいけないと思いました。心豊かな国になるように。祖父は今も仕事を続けています。これからは自分のための時間を大切にしてほしいのと、すこし身体を休めてほしいと思いました。

優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

かわいそうじゃないよ

大磯町立大磯小学校

五年 浅野

遥

私には、弟がいます。弟の名前は陽介で、ダウン症です。ダウン症とは、ダウンという名前の眼科のお医者さんがみつけたのであって、決して能力が低下するわけではありません。陽介は、他の子より体がやわらかかったり、なかなかうまくしゃべれなかったりするけれど、とてもかわいくて、人なつっこくて、とても優しいです。この前も、私がお母さんにしかられてへこんでいたら、陽介が、「だいどーぶ？」と言って、自分は悪くないのに、「ごめんね」と言ってくれました。だけど、お母さんにしかられても、私がへこんでいなかったら、陽介も一緒になつて「だめでしょ」としかつてきます。このように、陽介には、良い所も悪い所もあります。でも、それは障がいのない人でも同じです。

でも、陽介のことやダウン症のことを全く知らない人が陽介を見たら、どう思うでしょうか。

きつと、ずいぶん小さいなあとか、どうしてちゃんとしゃべれないんだろうとか思うのではないでしょうか。そして、陽介がダウン症だと知ったとき、かわいそうだと思うのではないのでしょうか。けれど、陽介や他の障がいのある子は、決して自分で自分のことをかわいそうとは思いません。私たちが、自分の短所を考えた時に自分がかわいそうだと思わないのと同じです。だから、みんなに障がいがあることをかわいそうだと思っほしくないのです。

それよりも、障がいのある子が何かができるできなかった時に、障がいがあるからといって、すべて代わりにしてあげるのではなくて、その子自身の力でできるようになるように手助けしてほしいと思います。なぜなら、障がいがあつても、がんばればできるようになることはとても多いからです。そして、障がいのある子が、何かできるようになると、その子はとっても喜ぶので、それを見てみると自分も嬉しくなります。その子ができるようになるように手伝ってあげれば、なおさらです。私も、陽介が何か新しいことができるようになるように手伝っています。例えば、ズボンの前後を確認してはくように教えたりしています。

障がいがあるといつても、違いは少ししかありません。だから、みんなと一緒に遊んだり、少し手伝つたりして仲良くなつてほしいです。そうしたら、もつと楽しくなると思います。

中学生の部

優秀賞

神奈川県知事賞

コミュニケーションについて思うこと

秦野市立鶴巻中学校

三年 渡部将弘

私には、言葉が話せない知的障がいのある弟がいます。弟は小学校一年生の時、平塚養護学校
知的障害部に入学しました。

平塚養護学校は、知的障がいのある子ばかりではなく、肢体不自由で歩けない子や手を動
かせない子たちも通っています。しかし、そうした子どもたちも運動会の時は他の子たちと
いっしょに競技に参加します。

私も、運動会を見学に行きましたが、そんな歩けないような子でも、車椅子や歩行器を使
って一生懸命汗をかきながらゴールをめざしている様子に、とても感動しました。その中には、

車椅子さえも自分の力で動かせない子もいて、先生たちが助けていました。普通の子の何倍も遅いスピードでしたが、周りのお父さんお母さんたちは、とても大きな拍手を送っていました。

運動会の時のお弁当では、体の弱い子もいるので、みんなそれぞれの教室で食べました。弟のクラスメイトの子たちはみんな知的障がいのある子ばかりでしたが、初めて会ったばかりなのに、どの子も笑顔で話をしてくれて、かわいい子たちばかりでした。先生もすごく優しくかったです。

弟は多動という障がいをもっていて、小さい頃からいつもじっとしていられませんでした。すぐにどこかへ行ってしまうったり、その場で何度もとびはねたり、大声を出したりしては父や母を困らせていました。私も恥ずかしかったです。

母が弟を連れて買い物に出なければならぬときなどはよく私に「将弘、一緒に行つてくれる？」と言われました。本当は嫌だなあと思うときもありましたが、母に「お兄ちゃんが一緒に来てくれると助かるの。敏くんの頼りになるのはお兄ちゃんだけなんだよ」と言われると、一緒に行つてあげようという気になりました。一緒に歩くときなどは、今でも手をつないだりしないと危ないことはいっぱいありますが、弟も母の次に私を頼つてくれているようなので言葉では何も言えませんが、すぐに手をつなごうとしてきます。恥ずかしいと思うこともあります。それでも頼つてくれていると思うと嬉しくも思います。

お正月や夏休みなどの長い休みの時や祖母の家のお祭りの時などは、親せきが集まるので

いとこたちも一緒に遊びます。子供たち四人で一緒にいてもいとこたちには弟の言葉や気持ちが変わらず、すぐに、「まあくん、敏くん何て言ってるの？」と聞いてきます。これはいとこたちだけではなくおじさんやおばさんも同じで、時々祖母ですら聞いてきます。私も弟が何を言っているのかはわからないのですが、弟の顔の表情やそれまでの行動とかから考えて弟の言いたいことがなんとなくわかるので、それを弟の代わりに伝えてあげるようにしています。みんな、「さすがはお兄ちゃんだね、すごいね」と言ってくれるので、そうすると何となく嬉しい気持ちになります。弟も子供たちだけで遊んでいる時に、自分の気持ちをいとこに伝えたいと思うようなときにはすぐに私の手をひっぱるので、それは「伝えてほしい」というサインだとわかります。

言葉は人と人が気持ちを確かめ合うのにとっても大きな役割をもっていますが、私と弟は言葉がなくてもなんとなくお互いの気持ちがわかり合っているような気がします。たくさんの人が私たち兄弟のように、障がい者の人たちや障がい児とふれあえる機会が得られたなら、言葉によるコミュニケーションが難しくてもお互いに理解しあえるのではないのでしょうか。

社会福祉とは表面だけの助け合いではなく、お互いを思いやる気持ちこそが一番重要なことだと思えます。それは決して難しいことではなく、私たちが一歩前に出て歩み寄れば相手も答えてくれるはずだとも思えるのです。

優 秀 賞

神奈川県教育長賞

今の笑顔があるということ

秦野市立大根中学校

一年 鈴木華純

私には二人のひいおばあちゃんがいます。一人は九十歳で、認知症のためグループホームという施設で暮らしています。

私のことも幼稚園生ぐらいで記憶が止まっているらしく「何年生になった？」と聞いては「そんなに大きくなったの？私も歳をとるわけだ」と毎回びっくりしています。特に新しい記憶はすぐに忘れてしまうらしく、同じことを何度も聞いたりします。反対に大切なおじいちゃんのことや田舎のことなど、昔の思い出はきちんと覚えていてくれるのです。

なぜ遠い昔のことほど覚えていいのか私は不思議に感じます。けれどおばあちゃんの話を聞いているうちに、その答えが見つかったような気がしました。戦争を生きぬいてきたおばあちゃんにとってこの頃が一番幸せで、人生を支えてきた楽しい思い出なのかもしれません。

大好きだった歌も勉強も戦争によって奪われた時代。それを取り戻すかのように大人になってから毎日、新聞の切り抜きをノートに書き写し文字を覚えたそうです。その宝のノートが何冊も残っています。今、あたりまえのように勉強ができる環境にいる私は恵まれているし、本当はありがたいことなのだと思付かされました。

最近のおばあちゃんは施設の中でタオルをたたむ仕事を任され、みんなの役に立つことに喜びを感じたりボランティアのお化粧の講座できれいにしてもらい、女ごころは忘れないというお茶目な一面を見せています。若い頃は人見知りで恥かしがりやだったおばあちゃんが、今ではたくさんの仲間とふれあいながら明るく元気に毎日を過ごしています。「私はちよつと頭がだめになっちゃったけど」と冗談を言いながら「元氣元氣、百まで生きるよ」と幸せそうです。

もう一人のひいおばあちゃんは私のおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住んでいます。そのひいおばあちゃんも小学校のときに戦争で二人のお兄さんを亡くしました。「すぐに戻ってくるからここで待っていてね」と言ったきり戻ってこず、戦死してしまっただけです。「戦時中の食べ物といったら芋ばかり。学校では竹やりで相手を刺す訓練をさせられたよ」と辛かった戦争の経験を話してくれました。

今では仕事に出ているおじいちゃんおばあちゃんがない間、家を守って大好きな花を育てたりしながらのんびりと暮らしています。手芸がとても上手で、時々私にも作り方を教えてくれたりします。目は悪いのですが四つ葉のクローバーを見つけてるのが得意な不思議な特

技をもつひいおばあちゃんです。「孫だけでなくひ孫の顔も見られるなんて幸せ者だ」と言いながら遊びに行くといつも可愛がつてくれます。

こんな二人のひいおばあちゃんはお正月に家族で集まったとき、気がつけば二人だけでこたつに入っていました。一緒にお祝いのお酒を飲みながらほろよい気分で昔の話で盛り上がっていたようです。私はそんなささやかな楽しみを邪魔してはいけないと思い、そつとドアを閉めました。

二人のひいおばあちゃんに学んだこと。今はあたりまえだと感じるものが決してあたりまえではなかったこと。それが小さな幸せであること。毎日を一生懸命生きてきたからこそ今の笑顔があること。私には『未来』があるということ。未来の幸せは今をどう生きるかで決まること。今が明日を、明日が未来を創っていくのだということ。そのために私は一日一日を決してむだにすることなく大切に生きていこうと決意しました。

大変な時代を生きぬいてきたひいおばあちゃんたちが安心して暮らせるような時代を築いていくことが、これからの私たちの使命です。

優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

「生きる」とは

伊勢原市立山王中学校

一年 須佐 みづき

テレビや新聞で特に選挙の時などに「福祉」という言葉をよく耳にします。

「この人たち、本当の福祉がどういうものなのか分かってるのかな」

なんて思っている私も良く分からないけど、口先だけで言っている人たちよりはまだいいのかもしれない。

私の妹は養護学校に通っています。母が送迎していますが週に二回「ひまわり号」が送迎をしてくれます。「ひまわり号」はボランティアの方々が運転と介助をしてくれて、妹はその日を楽しみに学校に通っています。ボランティアの方たちは一人一人の性格や特徴を知り思いやりを持って接してくれるようで、母はいつも

「本当に、ありがたいね。いつかお母さんもボランティアとして働き恩返しをしないとイケ

ないね」と言っています。もちろん養護学校の先生方もその子に合った学習方法を考え一生懸命関わってくれるそうです。放課後は日中一時支援を、土曜日は移動支援を受け楽しく過ごしています。もちろん近所の人たちや居住地交流で友だちになった小学生、私や姉の友だちもみんな明るく元気に接してくれます。

身近な人たちは妹に口先だけの「福祉」ではなく心のこもった優しさで接してくれるのに、国や政治家はどうでしょう。もちろん助かることですが、音の出る信号や手すり、スロープを備えつけることだけでは違うような気がします。私が思う福祉とは、大変な思いをして生活している家族の言葉に耳を傾け、何をどうして欲しいのか、何に困っているのかを聞いて対応することだと思います。

私たちが出掛けた時の話です。妹はメリーゴーランドに乗りたくて順番を待っていました。でも妹は自分の番が来ると急に足が止まってしまいました。いつものことですが私はムツとしてしまいました。すると、後ろに並んでる人が

「早くしてよ。何をしているの」

と騒ぎ出しました。妹は周りから急がされたり大きい声で急に話し掛けられることが苦手なので、まさしくその場所は妹にとって一番辛い所になってしまいました。本当なら文句を言い返し妹をかばいたいところですが、母がそっと妹の手を引き

「少し疲れたね。ごめんね」と列から外れて近くにあるベンチに妹と二人で座りました。いつもの母ならそんな人たちを許すわけではないのにその時はなぜか静かでした。

帰りの車の中、妹が楽しかった一日の夢を見ているような笑顔を浮かべ眠っています。その隣で母が

「日本も障がいを持った人たちに対しての理解も生まれ暮らしやすくなりました、なんて言うけど、実際はどうなんだろうね。今日だって、お母さんがこの子は障がいを持っていてから……と言ったら並んでいる人たちは分かってくれたのかな。逆に、だったら始めから並べせたりするな、と思われてしまったかもしれないね。悲しいね。身内にそんな子がいたら、同じことを言うのかな。」

と母がしばらくつぶやいていました。そんな母の姿を見るのは初めてでした。

私一人の力では世の中を変えることなんて出来ないからみんな考えてほしい。自分が障がいを持って生まれてきていたらどうしますか。将来生まれてきた自分の子どもに障がいがあったらどうしますか。そんなこと考えたことないかもしれないかもしれませんが絶対には言い切れません。そんな時泣いて悲しむだけでしょうか。私の母もそうですがそんな余裕はないと思います。ただ一生懸命に生きていくことだけを考え前に進んでいるはずです。そんな人たちに向かって文句を言ったりできないはずですよ。

私は妹の学校の運動会や文化祭などに行き逆に元気をもらって帰ってきます。どうしてだろう。それはきつと、みんなが一生懸命に生きてるからだと思えました。

生きるって大変だな……と思うけどだからこそ一生懸命になれるんだと思います。

優秀賞

テレビ神奈川社長賞

祖父が残してくれたもの

開成町立文命中学校

三年 鈴木 健

「おじいちゃんは肺がんがわかってから亡くなるまでの一年間は車いすで出かけたり、安楽なベッドを使うこともできてきつと幸せだったよ」葬式の席で親戚の人が言っていた。病気が知らずで畑仕事や旅行が大好きだった祖父は病気になるまではいつも元気に働いていた。七十歳を過ぎるまで板金業で家族を養い、その後は畑仕事に力を入れた。そしていつも誰かのために動いていた。僕が学校で具合が悪くなると保健室まで迎えに来てくれた。一人で留守番しているとそばにいてくれた。サッカーの応援にも来てくれた。

病気が発見され余命宣告されても僕たちの前では今までと変わらなかった。

「サッカー頑張っているか」

「じいじの作った野菜持っていくか」

と声をかけてくれ、帰るときは必ずごつごつした大きな手で握手をした。徐々にがんに体がむしばまれ、呼吸が思うようにできず苦しくなり、腰、背中、手足に激痛が走り、抗がん剤の副作用に苦しめられ、みるみるやせていった。入退院をくり返した。

まわりの大人たちは祖父に残された時間をいかに楽しく過ごさしめても苦痛から解放させてあげられるか話し合い、それを実際に行動に移した。一時退院できて体調の良い時は、車いすと布団を車に積んで叔父たちと小旅行に行ったり、温泉に行ったり。また介護制度も活用し、ベッドも借りることができた。祖母と二人暮らしのため病院の相談員や町の福祉関係の方などが家族に対してどのような不安があるかや困っているかなどを聞いてくれた。

祖父は僕たちがいるときはいつも穏やかそうに見せていたのだが、祖母と二人の時はちがったと言った。祖母は祖父の身体的苦痛を受け止め、精神的に投げやりになったり、悲しくなる祖父を見守り、いかなるときも寄り添っていた。今になって思うと二人とも同じくらい苦しく、同じくらい頑張ったのだと分かる。

十二月になり、ケアマネージャーとの契約も正式に決まり自宅で訪問看護を利用しようとしたその日に、激しい脱水症状で急きよ再入院となった。クリスマスの日の夕方、血圧が低下し家族親戚に見守られ静かに眠った。小さく二回息を吸って永眠した。

福祉とは「思いやり」「しあわせ」「ゆたかさ」と言いかえることができると思う。祖父母のように高齢者や病気で働けない人、何らかの障がいでもわりの助けがないと普通の生活ができない人にとってとても大切で必要な制度であるだろう。今までは理屈ではわかっていた

ものの、現実的に考えられなかった社会福祉制度の一部を今回祖父の介護生活の中で触れることができた。家族だけでは不可能な最期の「しあわせ」の手助けを、病院・町・国がしてくれた。それでも手続きの難しさやタイミングが合わないこともあり、祖母は困惑することもあったので、利用している声を反映させて更に充実した制度になってくれると嬉しい。

祖父は見返りを求めず常に他の人のために動ける人だった。恩着せがましくなく、さり気なく手をさしのべ、周囲に「しあわせ」な空間を作ってくれる人だった。

僕はテストができなくて落ちこんだ時や、友だちと少しうまくいかなくてイライラしている時は今でもじいじのごつごつした手の力強い握手を思い出してパワーをもらっている。祖父のように大きく広い心を持った強い人になりたい。そして祖父の生きてきた道でやってきたこと、それこそが「福祉」の原点であったことを確信する。

じいじ、これからは僕もじいじのようにまわりの人のために動ける人になれるように努力します。道標を立ててくれてありがとう。

介護の力

川崎市立南菅中学校

三年 宮城麗子

私は小学校に入る少し前まで沖縄でおじいちゃんやおばあちゃんと住んでいました。祖父は数年前に他界しました。祖母はアルツハイマーという認知症になり、現在は入退院をくり返しているようです。私には優しいおばあちゃん、一緒におもち作りをしたおばあちゃん、おいしいご飯を作ってくれるおばあちゃん、といった記憶しかなかったので病名を聞いてもあまりピンときませんでした。

昨年病院と老人ホームで職業体験をする機会がありました。おそらく祖母と同じ病気なんだろうな、と感じるお年寄りがいらっしやいました。いろいろなお手伝いをする中で大変だと思ったのは、お年寄りの皆さんの話し相手になることでした。普段は高齢の方々と話すことがないので何を話せばいいのかわからなかつたし、意味のわからないことを話してくるからです。でもスタッフの方が「同じ話をくり返したり意味不明なことを言ってもうなづいてあげてね」とアドバイスをくれました。私の祖母もきっとこんな感じなんだろうなと思うお

年寄りが出て、祖母に何年も会えていない私は少し淋しい気持ちになりました。お年寄りのお世話はとても大変そうでした。食事、入浴、排せつ、生活のすべてのことに介助が必要な方がたくさんいます。重労働だと思いますが、スタッフの皆さんはいつも笑顔で活き活きとしていました。優しく声をかけながら接していて、時には友だちのように楽しそうに話したりします。とても素晴らしい仕事、なくてはならない仕事、これからどんどん必要とされていく仕事なんだと思いました。そして私の祖母もこういう方々のお世話になっっているのかなあとありがたく感じました。

偶然ですが、私の母は老人病院で食事を介助する仕事をしています。寝たきりの方、認知症の方、それぞれの患者さんに合わせて食べさせ方を工夫するそうです。気持ちが悪く落ち着かない患者さんには娘さんになりきって接してみたり、片手をぎゅつとにぎって話しかけてみたり、痛いといっているところをさすりながら少しでもたくさん食べて欲しいと介助するそうです。一緒に働いている看護師さんたちはもっと大変だそうです。ナースコールはあちらこちらで鳴りまくり、枕の位置が悪いやら水を飲ませてくれやら。汚れたオムツを取ってしまふ人、歩けないのに車イスから立ち上がろうとする人。医療行為の他に様々な対応を優しい言葉と笑顔で行う看護師さんたちのことを、母は「本当に天使だよ」と感心するそうです。

このように高齢者の福祉を支えるのはこういった介護力だと思います。あと十数年もすれば高齢者の人口が三千万人に達するそうです。人口の三分の一が高齢者ということになるのだそうです。皆が健康であればいいのですが、病气、特に認知症となると家族だけでは

力はおよばず、そういった高齢者を支えていく若い力としつかりとした介護保険制度が必要だと思えます。

夏になると熱中症という理由で高齢者の孤独死のニュースを耳にします。誰に看とられることなく息を引きとるなんてとても悲しいことだと思えます。お金、病気、いろいろな事情があるかもしれないませんが、家族や近所とのかかわりを持たない高齢者が増えているんだなと感じます。

私は将来看護師になると決めています。しつかり働き、まずは保険料をしつかり払って高齢者を支えていかなくてはと思えます。ナーシングホーム、ケアつき住宅、共同住宅など地域や社会全体で考えていかなくてはいけません。それもまた私たち若い世代が考えていく福祉なのではないでしょうか。そして看護の場では笑顔を忘れず、一人一人の患者さんの気持ちによりそうことを忘れずしつかりと働いていきたいと思えます。

しかし本当のところ私は、高齢者の方々はまだまだ活躍できると思えます。たくさんいろいろな経験をしてきた人生の大先輩なのです。何歳になつたら定年などと言わず、たくさんさんの経験を活かせる場があり活躍できれば、認知症などという病気には負けたりしないのではと期待します。

優秀賞

ふれあい賞

本当の幸せ

相模原市立藤野中学校

一年 本間 敬之佑

ぼくが今まで思っていた障がい者にしてあげられること、それは街や電車の中で車いすや白い杖の人を見かけたら声をかけたりなどの手助けをすることだった。席をゆずってあげるなどで人の役に立てたりすると何となく満足していた。しかしあることをきっかけに本当の意味で障がい者を支えるのはそれだけではないのではないかと思い始めた。

この夏ヘレン・ケラーの「人は人の役に立ててこそ生きる喜びがある」という言葉に出会った時ハッとした。実際に助けてもらわなければならぬこともあるのは確かだけれども、常に助けられている人の気持ちはどんなだろう……。ぼくは自分が障がいをもっていても、少し考えてみた。そして思ったことは、手助けはありがたいが、かわいそうだとか変な同情や余分な心配をしてもらうのはうれしくないということだ。上手いかわなくても助けを借り

でも自分の力のできることは、自分でやった方がずっとやりがいがありうれしい。気の毒に思うとか、何かをしてあげるとか、助けてあげるとかという行動は善意から生まれることに間違いはないけれども、自分が常に優位な立場にあるから可能なことだが、本当の意味では障がい者のためにはなっていないのではないか。

実際よくが今までに直接出会った障がい者の方たちは、よくたちのそういう手助けは必要ともしてない人ばかりだった。例えばパラリンピックの車いすマラソンで活躍している土田和歌子さんは、講演会の演壇など一人でひよいと上がってしまし、急なスロープも前輪をあげたままスーツと降りてしまう。押してあげるなどの手助けはともいりそうにもなかった。車いすに乗ったことのないぼくにとつてとても信じがたい出来事だった。

また全盲にもかかわらずパラリンピックのマラソンで優勝した高橋勇一さんが走っている姿を見たことがある。伴走はついていられるけれど手を引いてあげるといふ次元の速さではなかった。目が見えていないとはとても信じられないような軽やかさだった。ぼくは目が見えないのに走らなくてどんなだろうと思ひ、伴走をつけて走ることを実際にやってみた。まず思ったことはいくら相手が信用できる人でも怖くて走れないということだ。自分も全神経を集中するつもりでやっても足下や前が心配で歩くことも難しい。そんな中でもあんなスピードで走り続けるなんてすごいと改めて感じた。

そして全盲のサックス奏者の女性には、目が見えないのにもかかわらずばらしい演奏をしていた。また音声ガイド付きの携帯電話を自由自在に使いこなしていたのには本当にびっく

りした。この方たちはみんな不自由なものがあるけれどもそれを克服して素晴らしい活躍をしている。なぜそんなに強く生きられるのだろう。

健常者は自分にはないものばかりを考えてそのことに対し不平や不満を言い、本当は持っているものも出せなくなりがちだが、この方たちにはないものはないと受け入れてそれ以外の能力を伸ばそうと努力しているからなのだろう。ここがぼくたちとの違いだと思う。ぼくは障がいがないがやはり恵まれたものに感謝するよりも恵まれなかったことについての不満を考えていたような気がする。それで障がい者の力になろうなんておこがましいとはずかしく思った。

改めて障がい者のために自分ができることは何かと考えると、喜びを後押しするとか喜びを分かち合うことではないかと思う。福祉作業所の商品（石けんやパンなど）を買うことも支援になるし、障がいのある人でも参加できるスポーツの大会に協力することも障がい者と喜びを共に分かち合う一つの方法だと分かった。

ぼくたちは障がい者の障がいを代わってあげることができない。しかし一緒に何かをし同じように楽しむことはできる。同情ではなく同じ立ち場に立って考える。それができればそのことが自分にとっても相手にとっても一番の幸せだとぼくは思う。

優 秀 賞

神奈川県共同募金会長賞

テニスボールのくつ

逗子市立久木中学校

一年 宮 澤

葉

中学生になって教室に足を踏み入れた時、「私のクラスだけ机や椅子がテニスボールのくつをはいているのはなぜだろう」と疑問をいただきました。

私のクラスに難聴のAさんがいることを知ったのはまもなくのことでした。その人は私の後ろの席でした。Aさんは補聴器をつけていても、人の声があまり聞こえないようでした。私の従妹は手話ができます。私はその子に手話を教わったことがあったので、あいさつや自己紹介、五十音の一部はできます。ですから自己紹介を手話ですると、Aさんはとても喜んで「上手だね。わざわざ手話で話してくれて有難う」とほめてくれました。しかしAさんは耳が聞こえにくいかわりに、耳の聞こえる私たちにはないすごい能力を持っているのです。それは読唇術です。読唇術とは文字の通り唇を読むということです。つまり、人が話して

いる時にその人の唇の動きを見て、その人が何を言っているかが分かるのです。私は、口ばくで話されても何を言っているのか全く分かりませんが、Aさんは、口ばくだけでもちゃんと話が分かっています。人間はどこかが欠けても、その欠けた所を補うことができることを私はAさんに出会って知りました。

私は、耳が聞こえづらいとはどのようなことなのか一日だけ耳栓をしてみました。すると人の声もあまり良く聞こえません。それにテレビの音も聞こえないのでちっとも楽しくありません。そして何より情報を集めることが大変でした。私は読唇術ができません。ですから読唇術ができるということはすごいことだと改めて感じました。

ある日学校にろう学校の先生が来て、「難聴を体験する授業」をしました。まづろう学校の先生が口ばくで何かを言って、何を言っているのかをクラスのみんなで協力して当てるゲームをしました。私も当てようとして先生の口をまばたきもせずじっと見つめてみましたが、当てることはできませんでした。どのように難しいかという、五十音の「ん」以外はのばして言うとは必ず「あ」「い」「う」「え」「お」のどれかになります。例えば「そ」をのばして「そー」と言うと「お」になります。他にも「と」ものをのばして言うと「お」になります。これらは口の動きがよく似ているので難しいのです。

それから補聴器の体験もしました。最初は「補聴器をつけたらよく聞こえるだろうな」と思っていました。しかし実際につけてみると他の雑音もひろってしまつて、まるでチャンネルがきちんと合っていないラジオのように聞こえにくかったです。普段意識していません

が、耳の聴こえる私たちは聴きたいと思う音だけが入ってきて、他の雑音は聞こえません。このように補聴器でも雑音の入らないものができると思いしました。

この授業を受けて、私は初めてなぜ机や椅子がテニスボールのくつをはいているかが分かりました。そう、雑音を出さなためだったのです。椅子や机を動かすたびに教室に響くあの「ギーギー」という雑音は補聴器でひろわれてしまいます。そのため聞きたい声や音が聞こえない、耳が痛いなどの弊害があります。そこでテニスボールをつけることによって音の響きが押さえられ、静かな環境になるのです。それは私たちにとつてもとても良いことです。なぜなら授業に集中することができるからです。

スポーツエコネットのホームページによると、日本のテニスボールの消費量は年間で約三千万個。廃棄処分されるものを千円募金すれば三百個送付してくれるとのこと。このシステムを利用すればまだテニスボールが装着されていない教室でも、より消音効果のある環境がつけられるのではと思います。それから大切なことは障がいのある人にも特別扱いをしないで健常者と同じように接することだと思います。もし自分に障がいがあつて特別扱いをされたら、きつと仲間はすれにされているような嫌な気持ちになるからです。ですから私は誰に対しても分けへだてなく優しい人になりたいです。

助け合い、一つになれる社会へ

厚木市立荻野中学校

二年 新井 佑里恵

私の母は障がいを持っている子が通う保育園で働いています。母は保育士です。以前は健常の子どもたちが通う保育所で働いていました。母が勤務先を変えたきっかけは私の兄です。私の兄は自閉症です。

「自閉症」という言葉を聞くと大抵の人は「大変」「かわいそう」などといった偏見、差別の目で見てきます。以前私の兄が外出先で大きな声を出してしまった時、周りの人たちにじろろ見られたり、もつとひどい時は何かコソコソ話されたりしてすぐ傷ついたし、腹が立ちました。自閉症の人たちは何を言ってもわからない、理解していきなと思われがちですがそうではありません。感情がうまく表に出せないだけで健常の人と同じようなことを思い考えています。自分の伝えたいことがうまく伝わらず、時々大きな声を出したりパニックになってしまいます。自閉症の人は意味があつてそういう行動に出ているということを知ってもらいたいです。

私は毎年夏休みに母の職場でボランティア活動をさせてもらっています。そこにはよくしゃべる子、すぐ頭のいい子、バギーに乗っている子や寝たきりの子などさまざまな子が来ています。その子たちは保育園に来てプールに入ったり、お散歩をしながら公園に行ったり、しゃぼん玉をしたり、工作で何か作ったりと健常の子と変わらない遊びをします。しゃべれない子や寝たきりの子でも、本を読んだり、マッサージをしたり、話しかけたりするとすぐうれしそうな顔でニコツとしてくれます。私はこのボランティア活動をするようになってから特に健常の子も障がいの子もあまり変わらなれないと思えました。言葉のキャッチボールがうまくできないだけでやっていることも思っていることも健常の子と同じだと思つたのです。何かできないことがあっても何度も教えてあげれば時間はかかりますが必ずできるようになります。

私の兄はとても几帳面でおだやかな性格です。家の中にゴミが落ちていたら必ず拾ってゴミ箱に入れるし、くつもきちんとそろえるし、ドアが開いていたらすぐに閉めに行きます。また昔から自分のお菓子を持つて来る時は必ず私の分まで持つてきてくれたり、私の分がない時は自分のをくれようとしていたり、とても優しい兄です。このように普段はおとなしくて家族思いな兄ですが、時々けんかをして私が言いたいことを言っていると、兄もすぐ怒って何かブツブツ言ってきます。ですからこういう時に自分がなんて言われているかちゃんと理解しているんだなと思つたりもします。兄はあまり上手にすらすらと話すことはできないのですが、短い言葉を使って自分の気持ちを伝えることはできます。最近ではレストランなどに

行って何が食べたいのか、飲みたいのかを質問すると自分でほしいものを答えられるようになりしました。言葉のキャッチボールも少しずつできるようになってきています。私もとても嬉しいです

また兄のおかげで出会えた友だちもたくさんいます。家族ぐるみでバーベキューをしたり、遊園地やプールに行ったり、花火をしたり、お泊まりに行ったり、たくさん楽しかった思い出があります。これも兄がいなかったら体験できなかったし、きっと知らなかったこともたくさんあったと思います。ですから兄には本当に感謝しています。

今の社会を考えると障がいの人たちへの理解が不足していると思います。例えば先ほども述べたように「自閉症」への理解がなかったり、障がいをもっている人に対しての支援のしかたがわからなかったりということですね。テレビや新聞にも障がいをもった人の話題が取り上げられることが多くなりました。こういう機会を通して障がいや障がいをもっている人たちへの理解が深まればと思います。

私は将来保育士を目指していますが、福祉関係にも携われたらと思っています。私がボランティア活動で経験したことや、兄から学んだことを活かしていきたいと思っています。そして障がいを持った人たちが今より少しでも生活しやすく、住み良い社会になる助けができるといいなと思っています。障がいを持っている人もそうでない人も協力し合い、一つになる社会を実現させていきたいです。

神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

小学生の部

準優秀賞

| | | | |
|----------------|-------------|----|-------|
| ひいおばあちゃん | 相模原市立青根小学校 | 一年 | 山口陽莉 |
| 事ここにあった時に思ったこと | 平塚市立富士見小学校 | 三年 | 桑野空 |
| ママのおしごと | 小田原市立酒匂小学校 | 三年 | 武藤海咲 |
| みんなでなかよく | 厚木市立飯山小学校 | 三年 | 安藤隆稀 |
| わたしたちに行き得ること | 横須賀市立城北小学校 | 五年 | 小熊愛乃 |
| 私の自慢のおばあちゃん | 秦野市立本町小学校 | 五年 | 三田帆乃果 |
| 桜の思い出 | 相模原市立中野小学校 | 六年 | 本山千尋 |
| 腕一本で、出来たこと | 伊勢原市立高部屋小学校 | 六年 | 上川珠未 |
| 弟は家族の宝物 | 寒川町立一之宮小学校 | 六年 | 木立百音 |
| 「バカヤロー」は元気の印 | 大井町立相和小学校 | 六年 | 香川唯 |

佳作

わたしにできること
車イスでお買ひもの
盲導犬に教わったこと
共に生きる
やさしい風
人は一人では生きていない
祖母のごみ捨て
車イスの設置について
私の弟はちがうけど仲間
小さなことから

| | | | |
|--------------------|----|----|-----|
| カリタス学園カリタス小学校 | 一年 | 大熊 | 芹奈 |
| 横浜市立釜利谷小学校 | 二年 | 星 | 菜々咲 |
| 川崎市立末長小学校 | 五年 | 俵 | 悠里 |
| 秦野市立南が丘小学校 | 五年 | 石井 | 悠太郎 |
| 南足柄市立北足柄小学校 | 五年 | 大野 | 藍丸 |
| 大井町立上大井小学校 | 五年 | 相田 | 大智 |
| 横浜国大教育人間科学部附属横浜小学校 | 六年 | 山田 | 健太郎 |
| 松田町立松田小学校 | 六年 | 矢野 | あゆみ |
| 開成町立開成小学校 | 六年 | 副島 | 佳歩 |
| 函嶺白百合学園小学校 | 六年 | 伊藤 | 花成 |

中学生の部

準優秀賞

ハンセン病資料館を訪ねて
勇気の三十秒ルール
小さい頃の友だち
同じ目線で
「歩行訓練士」を知って
介護の原点
壁は乗り越えるためにある
いつまでも元気で
僕の福祉
優先席という特別な存在

| | | | |
|-------------|----|----|-----|
| 相模原市立藤野中学校 | 一年 | 下前 | 晴幹 |
| 相模原市立上溝中学校 | 二年 | 松平 | 有希乃 |
| 秦野市立南が丘中学校 | 二年 | 木谷 | 仁美 |
| 伊勢原市立伊勢原中学校 | 二年 | 嶋田 | すず |
| 川崎市立南菅中学校 | 三年 | 石川 | 智子 |
| 秦野市立北中学校 | 三年 | 関 | 真人 |
| 厚木市立東名中学校 | 三年 | 服部 | 俊宏 |
| 伊勢原市立山王中学校 | 三年 | 山口 | 天紀 |
| 伊勢原市立成瀬中学校 | 三年 | 江尻 | 雄一 |
| 大井町立湘光中学校 | 三年 | 香川 | 遼太郎 |

佳作

今、福祉の手助けが必要です

祖母と私と認知症

不思議な連鎖

福祉の原点

祖父から学んだもの

押し車の大切さ

老いても一人の人間として

高齢者福祉「介護保険」30年後の不安

誰もが笑顔の社会に

伝わって変わった自分

三浦市立初声中学校

伊勢原市立中沢中学校

相模原市立鳥屋中学校

平塚市立浜岳中学校

厚木市立林中学校

大井町立湘光中学校

相模原市立大野北中学校

小田原市立鴨宮中学校

寒川町立寒川東中学校

大井町立湘光中学校

一年

一年

二年

二年

二年

二年

三年

三年

三年

三年

齊藤杏菜

吉村奈穂

津田美優

岩脇涼夏

大野未幸

水上明日香

松谷美千江

多田朱里

廣田佳香

三尋木沙帆

神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 平成 25 年度版

平成 26 年 1 月発行

発 行 者 社会福祉
法 人 神奈川県共同募金会
〒221-0844 横浜市神奈川区沢渡 4 - 2
電話 045(312)6339

社会福祉
法 人 神奈川県社会福祉協議会
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町 2 - 24 - 2
電話 045(312)4813

印 刷 神奈川新聞社
表 紙 鎌倉市立大船中学校
3 年 久野 綺音

ともしび双書



再生紙を使用しています



ともしび運動

ともしび運動は、高齢者も若者も、障害のある人もない人も、国籍が違う人も、すべての人たちがお互いに理解し、ともに手を携えて歩むことができる「ともに生きる福祉社会づくり」をめざすかながわの県民運動です。

社会福祉法人 神奈川県共同募金会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会